

令和6年度厚生労働科学研究費補助金（障害者政策総合研究事業）「処方薬や市販薬の乱用又は依存症に対する新たな治療方法及び支援方法・支援体制構築のための研究」（研究代表者 松本俊彦）
分担研究報告書

処方薬・市販薬依存症患者の入院治療プログラムの開発に関する研究

研究分担者 沖田 恭治

国立精神・神経医療研究センター 病院 精神診療部 第一精神科医長

研究要旨：

【目的】処方薬および市販薬使用障害患者を対象とした後方視的診療録調査の結果をもとに作成した入院集団精神療法のプログラム（以下、『処方薬・市販薬 FARPP』）を開発し、その効果を検証する。

【方法】2024年11月から2025年1月までに当院の精神科病棟に入院し処方薬・市販薬 FARPPに参加した患者を対象に患者背景や物質使用に関することを調査した。また、処方薬・市販薬 FARPP実施前後で評価尺度を用いてプログラムの有効性について確認した。

【結果および考察】現時点で9名がリクルートされ、そのうち6名が全セッション終了した。処方薬・市販薬 FARPPは高い継続率を示し、参加後は自己効力感の向上、不安や抑うつ軽減、自殺念慮や孤独感の改善傾向が確認された。

【結論】処方薬・市販薬 FARPPに参加することで、不安・抑うつ・孤独感などの処方薬・市販薬使用障害患者が抱える問題につながることを示唆された。今後、リクルートを継続し被験者数を増やし、引き続き効果検証を行なっていく。

研究協力者

石井香織 国立精神・神経医療研究センター病院
薬剤部

A. 研究の背景と目的

国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所薬物依存研究部が隔年で実施している「薬物使用に関する全国住民調査(2021年)」(嶋根卓也 et al. 2022)によれば、解熱鎮痛薬や精神安定薬を使用する人たちは習慣的使用・過去30日間の使用とともに増加傾向にあり、違法薬物の生涯経験率は減少傾向にある。さらに、同部によって隔年実施されている「全国精神科医療施設を対象とした実態調査」(松本俊彦 et al. 2023)によると、2022年のある時期に物質使用の問題を抱えて受診した国際疾病分類第10版(ICD-10)のF1圏の診断となる患者の主たる乱用薬物の割合は、覚醒剤が28.2%に対し医療機関で処方される睡眠薬・抗不安薬(以下、処方薬)が28.7%、市販薬が20.0%と処方薬・市販薬がほぼ半分を占める結果となった。特に2016年以降の処方薬および市販薬の割合の急激な増加は、薬物依存症の対象が覚醒剤をはじめとする違法薬物など、乱用のために合成されていた物質だった時代が過ぎ去り、疾病治療のために流通している医薬品が対象物質である時代に突入し、遥かに身近な疾患へと劇的な変貌を遂げてしまったことを示している。

本研究分担班では、3年の研究期間で精神科病床への入院加療を要することも多い処方薬・市販薬依存症患者を対象とした同疾患の入院治療プログラムの開発とその効果検証を完了することを目指している。研究班初年度に行った「国立精神・神経医療研究センター病院を受診した当該疾患の患者全例を対象として後方視的カルテ調査」より、処方薬・市販薬使用障害患者のうち入院を要する患者群の特徴として、外来で治療が完結する患者群と比較して、過量服薬による救急搬送歴、自傷行為・自殺企図の経験、精神疾患の家族負因、F3やF4などの併存精神疾患の診断、無職であること、依存症を対象とした集団療法(自助グループ含む)

の参加歴があることが示唆された。本年度はこの結果をもとに、処方薬・市販薬使用障害を対象とした新たな入院治療プログラム First Aid Relapse Prevention Program (FARPP) (以下、処方薬・市販薬 FARPP) のテキスト作成を行った。さらに、処方薬・市販薬 FARPP の効果検証の臨床研究を計画、倫理委員会の承認、プログラムの実施、効果測定を行っている。

B. 研究方法

効果検証について、処方薬・市販薬 FARPP 参加した患者のうち同意の得られた患者を対象とし、以下の項目について調査した。

- 主たる乱用薬物
- 使用年数
- 薬物問題の重症度を評価する Drug Abuse Screening Test (DAST-20)
- 性別
- 年齢
- 学歴
- 職業の有無
- 虐待・いじめ経験の有無
- 精神疾患の家族負因の有無
- 自傷行為・自殺企図歴の有無
- 精神作用物質使用による精神及び行動の障害以外の併存精神障害の有無
- 精神科入院歴
- 学校教育内での薬物乱用防止教育歴の有無
- 自助グループ・治療プログラム参加経験

また、プログラム実施前もしくは実施前後に以下の自記式評価尺度を用いて評価した。

- ① 薬物依存に対する自己効力感
- ② ベック不安評価尺度 (BAI)
- ③ ベック抑うつ評価尺度 (BDI)
- ④ 短縮版自殺念慮尺度
- ⑤ UCLA 孤独感尺度
- ⑥ 対人関係欲求尺度 (INQ)

研究の実施においては、厚生労働省の最新の「臨床研究に関する倫理指針」に準拠し、かつ、国立精神・神経医療研究センターの臨床研究審査委員会の承認を得て実施している（承認番号：A2024-090）。

C. 研究結果

1. 治療プログラムに用いるテキストの作成

昨年度実施した後方視カルテ調査研究の結果より以下のポイントを中心に処方薬・市販薬 FARPP 用テキストを作成した。

① 処方薬・市販薬使用障害患者は高校卒業以上の学歴を有するケースが多く、また入院を要する患者は依存症を対象とした集団療法への参加経験率が高かった。このため、従来のテキストよりも情報量を増やし、ルビ（読みがな）は付与しないこととした。また、処方薬・市販薬の薬理学的特徴や効果・副作用についても詳細に触れ、患者が使用している処方薬・市販薬への理解を深められるような内容とした。

② 入院を要する患者は、併存精神疾患を有しているケースや、自傷行為・自殺企図の経験があるケースが多かった。このことから、物質使用の背景にある不安や抑うつ気分、生きづらさといった感情面にもフォーカスをあて意図的に共感的記述を増やした。

また、FARPP は医師・看護師・作業療法士・精神保健福祉士・薬剤師など複数の職種が関与して運営されている。違法薬物を対象とした従来の FARPP と同様に、本テキストも計 4 回のセッション構成とし、ファシリテーターをはじめ運営する医療従事者が処方薬・市販薬 FARPP を実施する際に抵抗なく使用できるよう配慮した。

2. プログラム実施状況と参加継続率

倫理申請が受理された 2024 年 11 月より国立精神・神経医療研究センター病院精神科病棟において処方薬・市販薬 FARPP を実施している。2025 年 1 月までに同意を得られた患者は 9 名であり、全 4 回のセッションが終了した患者は 6 名であった。

そのうち、脱落者は 0 名であり、継続率は 100% であった。

3. 参加者の背景

同意を得られた 9 名の内訳、処方薬使用障害が 3 名（うち主たる薬剤として、ベンゾジアゼピン系薬剤が 2 名、プレガバリンが 1 名）、市販薬使用障害が 6 名（うち主たる薬剤として、コデイン含有薬剤が 3 名、デキストロメトルファン単剤が 2 名、ジフェンヒドラミン単剤が 1 名）であり、物質の平均使用年数は 6.00 (SD=4.80) であった。プログラム実施時の DAST は 12.11 (SD=2.89) であり薬物問題の重症度は中等度～最重症であった。

性別は、男性が 4 名、女性が 5 名であり、平均年齢は 28.9 (SD=7.46) 歳であった。高校卒業が 7 名、大学卒業以上が 2 名、有職者は 5 名であった。虐待・いじめの経験を有する参加者は 4 名、精神疾患の家族負因を有する参加者は 6 名、自傷行為・自殺企図歴ありが 9 名、処方薬・市販薬使用障害以外の併存の精神疾患を有する参加者が 8 名、精神科病棟への過去の入院回数は 4.78 (SD=3.87) 回であった。

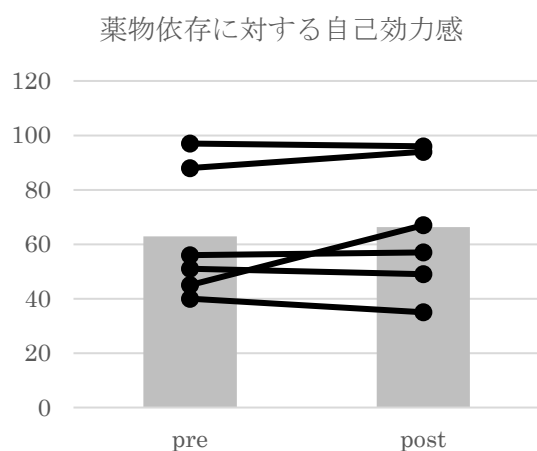
学校での処方薬・市販薬使用に関する教育経験があった者は 0 名であり、自助グループ・治療プログラム参加経験を有する参加者が 6 名であった。

4. 治療効果の検証

全 4 回のセッションを終了した 6 名の実施前後での結果を示す。

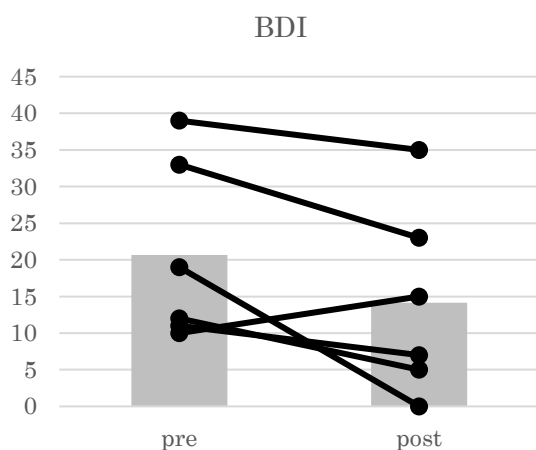
① 薬物依存に対する自己効力感の総得点

実施前は平均 62.83 (SD=23.78) であり、実施後は平均 66.33 (SD=24.56) であり増加していた。



② ベック不安評価尺度 (BDI)

実施前は平均 18.50 (SD=14.35) であり、実施後は平均 7.83 (SD=6.31) と減少していた。

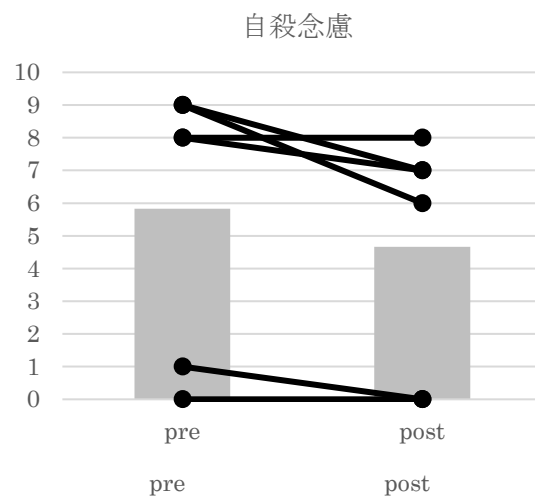


③ ベック抑うつ評価尺度 (BDI)

実施前は平均 20.67 (SD=12.44) であり、実施後は平均 14.17 (SD=13.03) と減少していた。

④ 短縮版自殺念慮尺度

実施前は平均 5.83 (SD=4.16) であり、実施後は平均 4.67 (SD=3.67) と減少していた。

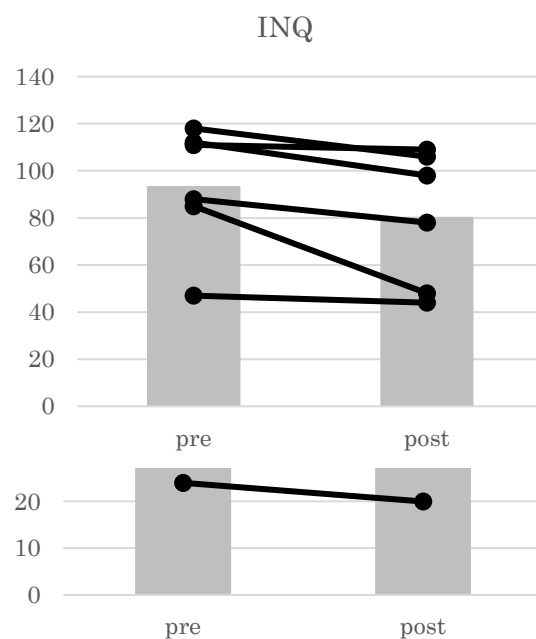


⑤ UCLA 孤独感尺度

実施前は平均 42.83 (SD=12.72) であり、実施後は平均 39.33 (SD=13.44) と減少していた。

⑥ 対人関係欲求尺度 (INQ)

実施前は平均 93.50 (SD=26.51) であり、実施後は平均 80.50 (SD=28.86) と減少していた。



D. 考察

昨年度に実施した後方視的カルテ調査の結果を踏まえ、処方薬・市販薬依存症患者の入院治療プログラムである「処方薬・市販薬 FARPP」のテキストを作成し、プログラムを実施した。参加者は3か月間で9名となり、現時点ではドロップアウトはなく、全4回のセッションを終了した患者は6名であった。これにより、本プログラムの継続率が高いことが明らかとなった。

作成したテキストについては、参加者から「過去のプログラムよりも話しやすいと感じた」「共感ができる話(を他患から聞けること)が多かった」

「外来でも同じようなプログラムをやしてほしい」との意見が聞かれ、患者背景にマッチしたテキスト内容になったと考えられる。

処方薬・市販薬 FARPP に参加した患者背景は、若年であり高校卒業以上の学歴を有するものが多かった。これは、全国病院調査や昨年度実施した後方視カルテ調査と同様の結果であり、同様の患者背景であったことがわかる。ただ、自傷行為・自殺企図歴があり、併存の精神疾患や家族負因があり精神科病棟入院回数も多いことから、物質使用障害以外にも精神的問題を多く抱えていることが示唆される。物質使用年数は長くないものの依存症の重症度としては高い患者であることから、処方薬・市販薬使用してから比較的に短い期間で物質使用障害に至っていることも考えられる。

薬物依存に対する自己効力感スケールは、得点が高いほど薬物への欲求が生じた時の対処に自信または自己効力感を持っていることを意味し、上昇傾向であったことから処方薬・市販薬 FARPP により薬物欲求への自己効力感が高まった可能性が示唆された。

また、BAI や BDI の平均値も改善傾向が見られ、不安や抑うつ症状の軽減が確認された。特に実施前に不安や抑うつが高い症例ほど改善傾向であった。さらには、自殺念慮や孤独感も改善傾向が見られ、負担感の知覚と所属感を測定する INQ の値も改善傾向であった。以上のことより、処方薬・市販薬 FARPP に参加し、医療従事者とともに処方薬・市販薬について学び、自身の感情や行動を認

知し、仲間と経験を共有したり共感したりすることで、孤独感が薄れ所属感が高くなることが考えられる。また、それに付随し、物質使用の背景にある不安や抑うつ症状の改善、自殺念慮の減少、最終的には物質に対する自己効力感が増加する可能性がある。

本年度の効果検証は $n=6$ とまだ少ないため統計検定は実施していない。来年度も引き続き処方薬・市販薬 FARPP を行いながら効果検証を行っていく予定である。

E. 結論

処方薬・市販薬使用障害患者を対象とした入院集団精神療法である処方薬・市販薬 FARPP のテキストを作成しプログラムを実施中である。6名の患者がプログラムを終了しており参加継続率は高かった。また、不安や抑うつなども改善傾向であった。次年度も継続してプログラムを行なっていく予定である。

F. 健康危険情報

なし

G. 研究発表

1. 論文発表

- 1) 沖田恭治.精神科疾患に対する向精神薬のオフラベル使用を考える 物質関連障害に対する薬物療法とオフラベルユースについて 臨床精神薬理.2024 年 12 月;27(12):-
- 2) 沖田恭治.物質・医薬品-1.依存性物質 3)鎮咳薬・総合感冒薬 精神科治療学.2024 年 10 月;39(増刊):-
- 3) 沖田 恭治.【精神疾患・精神症状にはどこまで脳器質的背景があるのか-現代の視点から見直す】物質使用症の脳器質的背景 精神医学.2024 年 4 月;66(4):412-417

- 4) 杉原有希, 山中恵里子, 村上真紀, 沖田恭治, 武村尊生, 武村尊生, 松本俊彦, 山口重樹. 多施設, 多職種の連携によりオピオイド使用障害から脱した症例を通して考える本邦におけるオピオイド使用障害への対応の問題点 日本サイコオンコロジー学会総会(Web). 2024 年; 37th0:-
- 5) 沖田恭治. 実態調査と臨床現場から紐解く市販薬使用の問題 日本精神神経学会総会プログラム・抄録集. 2024 年; 120th0:-
- 6) 五十嵐俊, 五十嵐俊, 沖田恭治, 林大祐, 野田隆政, 鬼頭伸輔, 鬼頭伸輔. Long COVID に続発した大うつ病性障害(MDD) に対する反復経頭蓋磁気刺激療法(rTMS) による炎症性変化について: 症例報告 日本うつ病学会総会プログラム・抄録集. 2024 年; 21st0:-
- 7) 沖田 恭治. 【アディクションとその周辺】アディクション総論 アディクションの発症機序と病態を説明する理論 ドパミンを無視してアディクションを理解すること勿れ 報酬系とドパミン神経伝達について 精神科治療学. 2023 年 10 月; 38(増刊): 44-48
- 8) 沖田 恭治. 【アディクションとその周辺】アディクション総論 アディクションの発症機序と病態を説明する理論 ドパミンを無視してアディクションを理解すること勿れ 報酬系とドパミン神経伝達について 精神科治療学. 2023 年 10 月; 38(増刊): 44-48
- 9) 沖田 恭治, 石井 香織. 【アディクションとその周辺】アディクション各論 物質使用症 薬物使用症の症候と治療 市販薬使用症 精神科治療学. 2023 年 10 月; 38(増刊): 178-183
- 10) Hiroshi Matsuda, Tsutomu Soma, Kyoji Okita, Yoko Shigemoto, Noriko Sato. Development of software for measuring brain amyloid accumulation using 18 F-florbetapir PET and calculating global Centiloid scale and regional Z-score values. Brain and behavior. 2023 年 7 月; 13(7): e3092-.
- 11) 林 大祐, 五十嵐 俊, 山崎 龍一, 松田 勇紀, 松尾 淳子, 稲川 拓磨, 川上 裕, 沖田恭治, 藤井 猛, 野田 隆政, 住吉 太幹, 鬼頭 伸輔. 磁気けいれん療法(MST)により寛解した高齢者うつ病の一例 精神神経学雑誌. 2023 年 6 月; (2023 特別号): S408-S408.
- 12) 林 大祐, 五十嵐 俊, 山崎 龍一, 松田 勇紀, 松尾 淳子, 稲川 拓磨, 川上 裕, 沖田恭治, 藤井 猛, 野田 隆政, 住吉 太幹, 鬼頭 伸輔. 磁気けいれん療法(MST)から電気けいれん療法(ECT)に切り替えた高齢者うつ病の一例 精神神経学雑誌. 2023 年 6 月; (2023 特別号): S409-S409.
- 13) 松尾 淳子, 林 大祐, 五十嵐 俊, 松田 勇紀, 山崎 龍一, 稲川 拓磨, 川上 裕, 沖田恭治, 藤井 猛, 野田 隆政, 住吉 太幹, 鬼頭 伸輔. 精神疾患へのニューロモデュレーション療法のための探索的マスタープロトコル アンブレラ・バスケット試験 精神神経学雑誌. 2023 年 6 月; (2023 特別号): S696-S696.
- 14) 沖田 恭治, 松本 俊彦. 【精神科医療の必須検査-精神科医が知っておきたい臨床検査の最前線】物質およびアルコール使用障害の診断・治療において望まれる対応と検査 精神医学. 2023 年 6 月; 65(6): 891-898
- 15) 沖田 恭治. 【感情の力 コントロールと言語化を超えて】臨床実践における感情作業 アディクション診療において感情を扱うことの難しさ アレキシサイミアとの関係 精神療法. 2023 年 4 月; 49(2): 207-211
- 16) Yoko Shigemoto, Noriko Sato, Norihide Maikusa, Daichi Sone, Miho Ota, Yukio Kimura, Emiko Chiba, Kyoji Okita, Tensho Yamao, Moto Nakaya, Hiroyuki Maki, Elly Arizono, Hiroshi Matsuda. Age and Sex-Related Effects on Single-Subject Gray Matter Networks in Healthy Participants. Journal of

- personalized medicine. 2023 年 2 月 26 日;13(3):-.
- 17) Yehong Fang, Yi Liu, Ling Li, Dara G Ghahremani, Jianhua Chen, Kyoji Okita, Wenbin Guo, Yanhui Liao. Editorial: Community series in neurobiological biomarkers for developing novel treatments of substance and non-substance addiction, volume II. Frontiers in psychiatry. 2023 年 ;14:1134561-1134561.
 - 18) Hiroshi Matsuda, Tsutomu Soma, Kyoji Okita, Yoko Shigemoto, Noriko Sato. Development of software for measuring brain amyloid accumulation using 18 F-florbetapir PET and calculating global Centiloid scale and regional Z-score values. Brain and behavior. 2023;13(7):e3092-.
 - 19) Daisuke Hayashi, Shun Igarashi, Ryuichi Yamazaki, Yuki Matsuda, Takuma Inagawa, Yutaka Kawakami, Kyoji Okita, Takamasa Noda, Tomiki Sumiyoshi, Shinsuke Kito. Magnetic seizure therapy for depression in the very elderly: A report of two patients in their 80s Asian Journal of Psychiatry. 2023;90: 103806- 103806.
 - 20) Shun Igarashi, Kyoji Okita, Daisuke Hayashi, Ryuichi Yamazaki, Yuki Matsuda, Takamasa Noda, Koichiro Watanabe, Shinsuke Kito. Neuroinflammatory Alterations in Treatment-Resistant Depression Secondary to Long COVID by Repetitive Transcranial Magnetic Stimulation (rTMS): A Case Report Psychiatric Research and Clinical Practice. 2024;6(2):63-64.
 - 21) Takashi Usami, Kyoji Okita, Takuya Shimane, Toshihiko Matsumoto. Comparison of patients with benzodiazepine receptor agonist-related psychiatric disorders and over-the-counter drug-related psychiatric disorders before and after the COVID-19 pandemic: Changes in psychosocial characteristics and types of abused drugs. Neuropsychopharmacology reports. 2024;44(2):437-446.
 - 22) Kaori Ishii, Kyoji Okita. Potential effect of ketamine in treatment for dextromethorphan use disorder exploding in Japanese young population. Asian journal of psychiatry. 2024;99:104164-104164.
- ## 2. 学会発表
- 1) Kyoji Okita, Noriko Sato, Yukio Kimura, Yoko Shigemoto, Mitsuru Syakadou, Yumi Saito, Toshihiko Matsumoto: Amyloid PET and diffusion kurtosis imaging for alcohol use disorder: a multimodal study. The College on Problems of Drug Dependence (CPDD) 85th Annual Scientific Meeting, Colorado, 2023.6.20.
 - 2) 沖田恭治, 喜多村真紀, 岡野宏紀, 齊藤友美, 嶋根卓也, 松本俊彦: (ポスター) 物質使用障害を取り巻くステイグマを惹起・持続させる言語表現に関する質的研究. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2023.10.14.
 - 3) 沖田恭治, 佐藤典子, 木村有喜男, 重本蓉子, 釈迦堂充, 齊藤友美, 松本俊彦: アルコール使用障害を対象としたアミロイド PET/拡散尖度画像 MRI 研究. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2023.10.15.
 - 4) 石井香織, 沖田恭治, 船田大輔, 勝海学, 松本俊彦: (ポスター) 国立精神・神経医療研究センターにおける市販薬使用障害患

者背景の後方視研究. 2023 年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 岡山, 2023.10.15.

- 5) 「ダメ」「ゼッタイ」という表現が違法薬物の使用経験を有する者に与える印象について 喜多村真紀, 沖田恭治, 岡野宏紀, 嶋根卓也, 松本俊彦 第 45 回全国大学メンタルヘルス学会総会 2023.12.21.
- 6) 沖田 恭治, 松本 俊彦, 齊藤 友美, 重本 蓉子, 佐藤 典子、パーキンソン病治療薬を用いた覚醒剤使用障害の薬物療法開発を目指した脳機能画像研究:中間解析、2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会、東京、2024/9/19、ポスター
- 7) 石井 香織, 沖田 恭治, 齊藤 友美, 吉澤 一巳, 松本 俊彦、処方薬及び市販薬使用障害患者背景の縦断的調査研究 (第 1 報)、2024 年度 アルコール・薬物依存関連学会 合同学術総会、東京、2024/9/19、ポスター
- 8) 沖田 恭治、実態調査と臨床現場から紐解く市販薬使用の問題、第 120 回日本精神神経学会学術総会、札幌、2024/6/20、口頭 (シンポジウム)

松本俊彦, 宇佐美貴士, 船田大輔, ほか (2022) : 全国 of 精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査. 令和 4 年度厚生労働行政推進調査事業費補助金 (医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業) 薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究 (研究代表者 嶋根卓也) 総括・分担研究報告書 : pp77-140

H. 知的財産権の出願・登録状況

なし

I. 引用文献

嶋根卓也, 猪浦智史, 山口裕貴, ほか (2022) : 薬物使用に関する全国住民調査 (2021 年) . 令和 3 年度厚生労働科学研究費補助金医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業「薬物乱用・依存状況の実態把握と薬物依存症者の社会復帰に向けた支援に関する研究 (研究代表者:嶋根 卓也)」分担研究報告書:pp7-148.

